

比較文學研究

特輯 アメリカ

アメリカ大衆小説の日本像——トレヴェニアンとは
 何者なのか……………小堀桂一郎 (1)

「大東洋」から「太平洋」へ——太平洋をめぐる
 日米比較関係史へむけて……………遠藤泰生 (25)

アメリカと日本における杉本鍼子の『武士の娘』……………平川節子 (40)

ヘンリー・ディヴィッド・ソローの野生のメッセ
 ージ——反西洋思想の展開……………藤岡伸子 (57)

カルチャーをめぐる——エマソンとアーノルド……………澤入要仁 (71)

ワシントン・スクエアの白い邸宅……………河島弘美 (86)

江戸後期の文人・田能村竹田と「無用」の詩画
 ………………エマニュエル・パストリッチ (95)

シビ王本生譚の分布と日本におけるその摂取……………君野隆久 (113)

[書評]

『ウルフの部屋』(宮田恭子)……………岡田愛子 (129)

*World-making: The Literary Truth-Claim and
 the Interpretation of Texts*(M. J. Valdés)……………三浦俊彦 (134)

『絵画の思考』(持田季未子)……………稲賀繁美 (141)

『ブルームズベリーの恋』(アリスン・ウェーラー)……………田中雅史 (144)

『美少年尽くし』(佐伯順子)……………平石典子 (146)

[Le Rond-Point]

比較文学比較文化研究室ガイダンス……………李建志 (150)

川本皓嗣先生『日本詩歌の伝統:七と五の詩学』出版記念会……………坂本兵部 (152)

第54回日本比較文学会全国大会及び学科旅行報告記……………榎本泰子 (155)

牧野陽子著『ラフカディオ・ハーン』出版記念会……………小宮彰 (157)

島田謹二先生文化功労賞受賞祝賀会……………平川節子 (159)

シカゴ大学創立百周年記念国際シンポジウム
 「跨文化的意疎通と国際理解」に参加して……………稲賀繁美 (160)

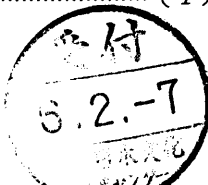
芳賀徹教授著作目録……………(171)

亀井俊介教授著作目録:1953年—1992年……………(194)

外国語要約……………(1)

63

東大比較文學會



シカゴ大学創立百周年記念
国際シンポジウム

「跨文化的意味疎通と 国際理解」に参加して

稲賀 繁美

一九九一年、スペイン、ラ・コルーニャ大学主催の学会「現代諸宗教の相互人類学」に参加したシカゴ大学人類学教授 James W. Fernandez 教授からのお招きで、一九九二年九月十二日から十七日にいたる表記の学会に参加した。以下簡略にその報告を（義務として）申し上げる。

前日シカゴ到着はすでに夜。あるはずの迎えもなく、手作りの案内書類の番地表示も間違っていて、大学構内の宿泊施設発見に手

間取る。ようやく幅百メートルはある暗黒の空き地に面した巨大な箱型の建物を捜し当ててみると、薄暗いホールにはインド人と覚しき人影がふたり。受付の気さくで気の効く（黒人の）おばさんが、迷って今ご到着のご同類だよ、というので尋ねてみると、比較的若い方が小生と同じセッションで発表する予定の、Majid Siddiqi、ネルー大学教授、風格ある方がデリーの Aahis Nandy 教授だった。おふたりとも英国経由の長旅の末ようやく到着されたところ。二階にあがると、館長直々に「許可なくならば消費することを許可する」という粋なお許しをくださったビール類の類が冷蔵庫に入っていて、これを軽く飲みながら談笑する。外部の電話連絡も取れず、明日からの予定も皆目見当がつかないが、お互いもう慣れっこで、今更心配もしない。

いずこも事情は同じで、実は予算削減の折から、送迎も大学院生の愛称 Roy 君がひとり朝から晩までピストン輸送。補助金集めから会議設定のお膳立て一式までフェルナンデス夫妻が一切を取り仕切っておられたとのこと。だがそんな内輪の苦勞をご本人たちはおくびにも出さず、ジョークと余裕をもって問題を捌かれる。夏期休暇の末として、いろいろ

機能停止している施設を騙し騙し、ひたすら歓待に徹するの、世界に誇るシカゴ学派、人類学教室の品格というべきか。

翌朝。緑地帯を跨いだ向こう側のインターナショナル・ハウスのカフェは休暇閉店として、昨夜のおふたりと鉄道高架にほど近いカフェに足を伸ばす。会話の端々から、ご兩人ともシカゴ大学の古参であることが徐々に知れてくる。卵の個数からソーセージの本数までいちちお尋ねのアメリカ式注文で朝食がてら話し込んでいると、協賛団体トランスクルトゥラの会長 Alain le Pichon 氏と広東・中山大学の旧友、何安萍 He An Ping 夫人、王寶 Wang Bin 教授が連れ立って現れる。やがて今年からパークレーに出講の人類学者 Michael Gisan 出現。やはり知人に会うと安心するもので、一年ぶりの再会を喜び合う。

この日の夕方からレセプション。スペインでは気さくな格好だったジェイムズは、本日はホストできちんと正装。着席してみると、隣席はなんと Milton Singer 名誉教授。中根千枝女史の本からはじまり、『甘えの構造』、ハルミ・ベフの本のこと、さらにはロラン・バルトの日本論からモリス・パンゲ氏の本、三島のみならず、谷崎、大江などなど次々と

質問を浴びる。どこの国のお客相手でもこの調子なのだそう。この首実検に頭が突如フル回転。自己採点ではなんとか及第点というところか否か。まだこんなタイプの方が生きているのだ。

*

などといった調子で書いていては小学生の作文なので、会議の中身に入る。方式は午前午後、すべて全体会議で、それぞれ二人の報告とディスカッションおよび司会による参加。バイバーはすべて前以て配っておいて、できれば口頭で論じる、という原則。ただしディスカッションも司会もそれぞれ自分のしゃべりたいことがたくさんありすぎて、自己主張の強い人間による時間独占の傾向。よって討論は寸足らず。これに加えて夕食後にはアメリカお得意の、夜のスペシャル・トーク。学会での権威に敬意を表する必要のある招待者たちに一時間の割り当てだが、誠実だが退屈な大家が多く、当方は食後に時差ボケが出て途中で「昏倒」したりして困った。最近不況のせいとか、どこへ行ってもそうなのだが、特定の学会の礼儀作法に安住し、内輪のみ流通する must の本の著者名と空疎な隠語を取り交わすだけの政治的儀式に自足するタイ

プの発表が多く、今回のシンポジウムでも、二度ほどあまりに頭に來たから、フランシス・フクヤマの名やハーバースの community-cannality とか public sphere などの用語を借りてそのパロディーまでやったりしたが、はつきりいつて越境の危機意識を實踐した、緊張感ある面白い発表は、都合五つしかなかった。

まず「国境を越えた意思疎通」セッションでは若手の人類学者 Ruth Behar がフィールド体験を語った。異境で手にした宝を祖国にもち帰り、學術英語でその成果を発表すれば学者として認知される。こうした学問儀礼がいかにも現場での体験を裏切るものかをそのまま論文にするのは、クラパンザーノやモリス・ドワイヤーをモデルとして、ここ十年ほど流行ではある。だが、出発点で素材に疑問に思うべきところに素直にこだわった彼女の体験談は、語り部としての才能とも相俟って、聴衆を惹きつけた。メキシコのフィールドでインフォーマントとしてある老女を選んだのは彼女ではなかった。老女が彼女を聞き手として選んだ、という転倒した関係からすべては始まった。土地のひとが魔女とも噂するこの女性から、自分の半生を英語で国境の向こ

いから、時間が來たら妨害してくれ、と冒頭に宣言しながら、彼がちゃんと時間制限を守って話したのは、なんと幼いころ親しく接する機会があったパール判事と東京極東軍事裁判のことだった。欧米の国際法を唯一正しく理解し、裁判の報復性、政治性を糾弾したとされるパール判事の発言は、侵略の事実とその犯罪性とを峻別している点で、実はベンガルの慣習法の立場を反映しての解釈だった。とするのが、簡略ナンディー氏の見解である。奇しくもシカゴ大学に留学していた牛村圭氏の研究とも重なる問題意識であり、小生も昨年のラ・コルニャで類似する観点から戦争裁判を論じていたが、インドから思わぬ視点を示されて、あらたな三点測量の可能性が開けてきた。この偉人のことがインドではすっかり忘れられてしまった、とナンディー氏が嘆くので、日本では高校の教科書にもちゃんと出て来ますよ。伝記も最近公刊されたはずです、と答えておいた。そんなことは先刻ご承知のナンディーさんだったか、彼と以降すっかり意気投合したことは、言うまでもない。彼の発言したセクシオン「諸科学の論理と人文学の倫理」の主筆は Singer 老教授だったが、ゆっくりとしゃべる言葉がそのまま文

うで発表するのは構わないが、スペイン語では決して公表しないでくれ、と頼まれた彼女は、メキシコ国境からアメリカ合衆国に戻り、税関を通過するときに、自分には知的にも something to declare がある、と悟る。人類学者の務めとはこの文化上の税関申告ではないのか。そして彼女はメキシコに行つてはじめて、コンベルツを先祖とするスペインの血をひくキューバ難民と東欧亡命者との子という自分の「境界人」性に気付きはじめる。こうしたこだわり自体、『ルーツ』や『プレイド・ランナー』にも見られる特殊アメリカ的なアイデンティティ神経症かもしれない、などと失礼な感想をこの中々の美人には呈してしまつたが、とまれメキシコでの偶然の出会いを出発点として、大航海・植民地時代

まで遡り、自分の文化的先祖を探る世界的な視野が開けはじめたのは壯観だ。それで大航海時代に境界を跨ぐことは西欧の知にいかなる変成作用を及ぼしたのか。この問題は同じ日の夜、スリランカの宗教人類学者として著名な「仏教徒」Ganathu Obeyesekere によって鮮烈に論じられた。俳優で通りそうな美貌と六十歳とはとても感じられない若々しさ、どこかシャーマンを思わ

章になりそうなる正確無比の古風な英語の美しさと、膨大な知識の蓄積のうえになおある普遍的な科学認識に到達しようとする一種の狂気を感じさせるこの碩学の談話は、徐々に熱がこもり、聴く者を捕えて離さない。パール代数の提唱者ジョージ・プールの未亡人、メアリー・エヴァレストの「妹の力」を説く

意外外の構想で、夫の代数に心理学的解釈を加えた彼女の(当時は神秘的ともいわれた)見解は、その協力者でもあるシカゴのダマー未亡人を經由して、サビアや、ロバート・レッドフォードといった人類学者(とりわけ後者の異文化間意識疎通論)に示唆を与えただけか、これがヤーコブソン、レヴィ・ストロースやラドクリフト・ブラウンの数学援用とも並行して、構造主義の理論的枠組みの基礎を提供していたことを、ニールス・ボーアの相補的対立を総合する場の理論などを援用して立証しようとする(多少危うい)知的曲芸であった。一冊の著作を三十分に圧縮したうえに、数学的な細部ははしょった立論であるから、小生の英語力ではとても十分には把握できなかったが、理論的な仕事を日常社会現象へと心理学的に変換して創造的に解(改)釈し適用した夫人たちの直観的発想に、

せる鋭い目鼻立ち、そして驚異的な頭脳の回転と爆発的で自由自在のしゃべりっぷり。その話題は、最近はやりのキャプテン・クック。ポリネシアでの食人の風習をクックの草稿編纂者がいかに原稿改竄のうえでつち上げていったかを、当時の英国の文化的な要請とも絡めて「精神分析」し、その神話的な英雄伝説形成の構図を解剖する、いわば倒立した人類学演習。クックにプロスペロの姿を透視しつつ、最近の『テンペスト』読み直しに見える、西欧アカデミズムに取り入った態度を断固として批判し、科学の言説における知的論理の相互性確立による地平の融合といった夢想に抵抗し、逆にこれをいかに「感染」させるかに異文化翻訳者の使命を見いだす氏は、最近の植民地主義批判の立場からする異人論(たとえばトドロフ)は西欧人のみが individual であり、征服された側はいわば *dividual* しかない、とする暗黙の前提を無意識に引きずっているとしたが、これは、河合隼雄流ユング理解による「日本人の心」構造分析への最近の柄谷行人の批判にも通ずる論点であった。これを受けて、翌日、異なる文化間の論理の衝突の具体例を示したのが、Aatis Nandy である。例によってしゃべりだすと停まらな

理論言語と日常言語との、パラダイムを越えたコミュニケーションの可能性を夢みる、それは美しく若々しい話であった。

異文化のつきあいなんて、インド人はクリケットのつもりなのに日本人は野球のつもりでいたりして、実はそのどちらでもないゲームをやっていたりするから、一週間くらいは一緒にやってみないとお互い何を考えているのかよくわからん、とはナンディーさんの冗談だが、まさにこうした矛盾を隠蔽する普遍的な尺度の幻想を植え付けることで成り立っているのが国際スポーツ競技だ。登壇は、オリンピックの人類学的分析で有名な John MacAloon 教授。時代が時代ならカウボーイだったに違いない精悍さに、完璧な速射砲的発声装置とカッコいい文体をもったアイリッシュ系シカゴ人。一緒に話しても、おたがい次々に発想が湧き出るといったタイプの人物で楽しく、現地調査の経験ゆえか、韓国社会のことに詳しいのにも感心した。

全世界三十五億の人間たちがとにかくそれを見てしまったというパロセロナのオリンピック。この人類最大の観客動員力を誇るセレモニーは、一世紀まえの万国博覧会がそうであったように、いわば今日の世界システムの

ミクロコスモスをなし、文化的なレヴェルでの代償行為としての戦争ゲームによる、民族主義のカタルシス発生装置として機能してきた。だがその普遍的ヒューマニズムの理念はそこに参加する文化の複数性という現実と裏切られる。例えばおおくのイスラーム諸国から女性の参加者がなかった点に西欧フェミニズムの側から批判の声があがった。オリンピックの言い立てる人類の普遍的な参加権(「参加に意義あり」)なるものは、西欧フェミニズムと非西欧社会での宗教原理との間に優先権を付けるに際して、IOCの半数のポストを独占する西欧のかかえるジレンマをはしなくも露呈してしまっている。また国民国家という単位の自明性がこれほど問い直された大会もあるまい。マッカールのチームは、二十五ヶ国でいったいこのオリンピックがどのように放映されたのかを、その水面下での取引を含めて執拗に分析する。まず開会式の時刻からしてアメリカ合衆国の多くの視聴者たちがリアルタイムで見物できるかどうかで左右されたのだ。「国威発揚」への生理的嫌悪感を感じる程度のレヴェルだった筆者は、大衆操作の神話的機構をつぎつぎに摘出するマッカールの分析に接して、その時だけはずいぶ

験成功を称讃する、ヘンリー・ムアの《アトム・ワーク》のレプリカ版が広島市立現代美術館正面から撤去された一件を取り上げ、同席の人たちに謎をかけてみた。この作品は「核称讃」であり、平和都市ヒロシマにとってふさわしくないと市議会で非難されたが、だからといって高価な買物物の失敗を認めるわけにも行かぬ市当局は、さていかに巧妙に対処したか。そもそもケチをつけたのは自民党議員か共産党議員か。意味を開きながら意味をしい込む「作品」とそれを包む「環境」との化かし合いを分析するだけでも、ウルバンの抽象論よりはよほどまざまざと世界の仕組みが見えて来るはずだ。

また、所属と認識との関係に異文化間コミュニケーションの鍵を探すシンガーの提案を受けて、ブル代数とスペンサー・ブラウンとを関連づけ、グルーチョ・マルクスのあの「自分がそのメンバーであるようなどんなクラブにも自分は属しはしないぞ」という、ラッセルのパラドックスに連なる言表を検討した Louis Kaufman の発表は、(以下述べるように)小生にはとても示唆的で、このユダヤ人の諧謔と図像感覚がそれはおもしろいものだから、大学の近くのタイ料理屋へ奥さん

んと賢くなったような気がしたものだ。逆説的にも、記録といった絶対の尺度を貫徹するヘゲモニーによって「人類みな兄弟」の幻想を捏造する文化装置こそが、文化的な差異をやり過ごすのに最適で簡便な手段なのである。

さて、これ以外の発表はまったく無意味だった、などと言うつもりはない。Stadiqi は第三世界の現実とそこから遊離した西欧の理論構築との狭間で空回りする自国の「人文科学」の矛盾を内実・文体ともみごとな英文で告発して、小生が今までとかくインド知識人層に対してもっていた偏見を一掃した。また広東から参加したふたりの中国インテリの発言は常ながら見事で、ともに文化大革命に苦しんだ世代である何女史の境界人たる英語教師の自覚に裏打ちされた良識(言語的正確さが文化的誤解となる具体例の分析)と、ポロニーヤでウンベルト・エーコのところに留学し、欧・中の美学や哲学における基本的語彙の懸隔(そもそも哲学とは何か、の意識のずれ)にあらためて驚いた王賓氏の根底の問題意識とは、その卓抜な英語でのパフォーマンスもあって、門戸開放に臨む中国の外国認識の最上の部分の水準をはっきりと示してい

ともどもお誘いし、アラン・ル・ピション氏も巻き込んで一席設けた。それも思えば大澤真幸氏の『行為の代数学』(青土社)などという奇特な書物が日本にはあるからであって、カウフマンとシンガー以外、会場で誰も知らない異色の数学者の仕事にまがりなりにも応じた自分が生きていく、あの日本の学問界の水準に改めて感謝した。

＊

さて、他人様の仕事にケチをつけた以上、最低限自分の悪事にも言及せざるばなるまい。十五日午前中が当方の順番で、司会は最近日本国憲法制定過程についてカリフォルニア大学出版部から大著を出された Kyoko Inoue 女史。当方の演題は「寛容の否定的能力 Negative Capability of Tolerance」。昨年刺殺されたイスラーム学者五十嵐一氏の業績を、異文化交渉の視点から批判的に検討した。西欧ではかろうじて、サルマーン・ラシュデー『悪魔の詩』の日本語訳者が暗殺された、といった程度の認識しかない。その「訳者」がいかなる「生涯一学徒」だったのかを、残された仕事から説明するだけのことである。準備のために、五十嵐氏の入手可能な著作はすべて目を通した。最初はこの訳業に一種の

た(とはいえ前者が用語論の水準を出す、また後者が中国哲学とは何かを論ずるために西洋哲学の大立者たちを十把ひとからげに論じ去る乱暴さが「本場」での議論とはとても噛み合わぬことは、その場でも指摘した)。むしろスペインや南米からの参加者の英語が、はつきりいつてまったく意味不明で、かれらの熱意はひしひしと伝わるだけに、あらためてアメリカ合衆国とイスパノ・アメリカ圏との南北問題がらみの文化交流の困難を、はからずも実地に見せつけられたような気持ちであった。

また核戦争を扱った映画の分析を試みた、オースティンの Greg Urban の発表も、その意図やよし。とはいえ、『ゴジラ』、『アキラ』、『沈黙の艦隊』、『黒い雨』などの輸出作品を持つ日本から来た人間としては、「外」に対して閉ざされ、アメリカに自足した感性には落胆を通り越して危機感すら抱いた。オースティン関係者は自分たちの担当が済むとさっさと帰ってしまったので、意見を闘わす余裕もなかったが、翌日の昼食の席で、パークレーの John Gumperz、スウェーデンの Ulf Hansenz 夫妻などと会食した際、シカゴ大学構内にある、エンリコ・フェルミの核分裂実

売名行為のような不純さ、山つ気を感じていた。ベルシアはいざ知らず、インドやパキスタンの政治的状况についての彼の認識の甘さが最初信じられなかった。だが、途中から五十嵐一の澄んだ狂気に取り憑かれた。それは一昨年、必要あってヴァン・ゴッホの手紙を読みなおした機会以来の、憑依現象であった。

奇妙なことに五十嵐氏はなぜラシュデー

のこの作品を是非とも自分が訳したいと思っただかの理由を、直接関連する文章では一度として正直に言明していない。その鍵はむしろ『精神的マスマナヴィー』の葦笛の歌に隠されてはいまいか。葦は葦原から切られてはじめて笛となるが、その歌う歌は離別の悲しみである。そして残された笛の存在は理想の奏者の不在を示す。これはエグザイル文学の原型であり、また翻訳による意味の渡りの暗喩ではないか。そのあたりから様々な謎が次々と解けはじめ、自らの属さないイスラーム共同体にそれゆえの全人的関心を抱き(右に引いたグルーチョ・マルクスの言葉を参照)、トポロジックな意味でイスラームの特異点として死ぬことに賭けていた五十嵐氏の心境が臍げに浮かび上がるにつけ、自分でも恐ろしく

なつてきた。氏の命を奪ったのが何者であれ、それよりはるかに大切なのは、そうして仄かにみえてきた氏の信念の脈絡だった。まだ幾つかジグソー・パズルのピースが欠けたままとの印象も残しながら、もとより拙い英語でそうした危うい仮説五十嵐像を述べただけのことである。だが、聴衆の反響に我ながら驚かされた。

井上さんの実に良心的な司会ぶりには、いままさら言及すまい。当方の言い足りぬところを、十二分に繊細に補ってくださった（それにして井上さんの上記の本を日本語に訳す予定だったのが、他ならぬ五十嵐雅子夫人だったのには、少なからず驚いた）。だがそれにも増して、デイスカッサントとして参加してくださった A. K. Ramanujan の配慮と知性心から打たれた。かれは古タミール語をはじめとして、南インドのさまざまな古典語に通じ、その一生をこうした祖国の古典翻訳に捧げてきた文献学者である。小柄な体格と謙虚な人柄に完全に騙された。若輩の当方にたいては常に謙った態度と物腰で、しかし当方の四十分に満たない発表のために、前々日から執拗に質問を重ねて来る。彼と話すと思議と当方の英語も洗練されるような気がして

てないけど、五十嵐のは自分流の解釈だね、といなされた。英語への母国語古典の翻訳は英文学の蘊蓄を極めていけばこそ許される特権的な越境行為なのだ。日本のまじめな英文学者たちにこそ、こうした現場第一線の学者のお相手を願いたい。もとより無知な門外漢の出る幕ではなかった。

ただ無能な媒介役でも媒介欠如よりはましでありたい。王賓からはトンネルを両方から掘ったら真ん中で出会わず結局二本出来たが、かえって良かったという、例の敵復の冗談で援護射撃してもらい、席を立つとシディッキさんから力まかせに抱擁され、ジルセナンからラシュデーイーにコピーを見せても良いかと問いわれ、フェルナンデス教授からもウインクつきの過褒を頂戴して恐縮し、午後になると急に皆からファースト・ネームで呼ばれて、驚いた。まあ下手なりに最低限の責務は果たせたのかも。調子に乗り過ぎると鶴見祐輔の『北米遊説記』になり兼ねぬから慎むが、改めて得た感慨がある。功名心からではない、五十嵐一ノ著が私に強いただけのことだ、かれの仕事にそれだけの力があつたのだ、この思ひである。

ついつい得意げに長弁舌をぶつていたのだが、ちよつとも本人の関心に沿う問題が出て来ると、穏やかな笑顔ひとつ変えずに、自らシカゴ大学のセミナリオ書籍購買部に案内して下さり、関連する（ペンギン・ブックスをはじめとした）ご自分の訳書をそれとなく引き抜き、さらりと署名して渡して下さる。さすがにニブい小生もこのあたりで悟った。まづい、これはオソルベキ、ホンモノだ。

そのラマヌジャンさんが小生の発表にたいして加えられた講評はちゃんとテープに残して、つもりだった。一生の宝と思ひ、今日まで再び聞く勇気がなかったが、まんまと録音に失敗している。痛恨の極みだが、話の枕からして印象的だった。彼の生まれ故郷ボンベイの話だ。為政者の名にちなんでハミルトン・ブリッジと呼ばれた橋は、タミール語では散髪屋と聞こえる。いつしかパーバー・ブリッジと呼ばれるようになると、今度は本当に散髪屋が集まりはじめ、散髪屋界限となつてしまった。翻訳の力とはさようなものだ、とラマヌジャンは言う。タミール語では「翻訳」とは「外国の言葉でも敢えて耐えること」を意味するという。これを出発点にアジャセ・コンプレックスまでも引き合いに出し（こ

当初は In Search of New World Order などという題目が提案され、マドリッドの Carmelo Lison 教授などが New World Disorder ならともかく、などと皮肉な対案を提出する間にロスアンゼルスでは「反乱」という国際的ならぬ inter-national な問題が発生し、また程なく愛知出身の交換留学日本人高校生が射殺されて、思わぬ国際社会問題となるだろう（宮沢労働倫理発言がメディア各社の思惑に沿っていかに「誤報」さわぎになったのかも、何度か説明させられた）。紆余曲折のすえ実現されたこの会議もなんとか無事に終了し、エクスカーションにはシカゴ都市事情を市当局の広報官の案内でつぶさに見学したが、レバノンの亡命詩人 Joseph Seyech など、巨大ビルの放置された大学周辺の郊外のスラム化や、church for let の看板、保険金目当ての空き家放火の実態にほとんど卒倒しかねぬ有り様だった。それでも建築の博物館といわれる旧市内を一巡し、夕方から遊覧船に乗り込み、両側を巨大なポスト・モダンの摩天楼に挟まれた運河を伝って、頭上の橋の交通騒音が耳を聳するなか、ゆつくりと

ミシガン湖へと進むと、沖合からのシカゴの夜景はこの世ならぬ空想都市へと変貌してゆ

れはオベイセケールの titidal と、パール判事の「母の力」を語ったナンデーイーの「精神分析」への、それとない「種あかし」だろう）パースやチョムスキーを自在に展開する氏の論法と学識とは到底ここに要約できないが、自国の古典を英語に移し、内の物語を外に開いて送り届けることに生涯を賭け、だからこそ凡百のネイティヴ・スピーカーよりもはるかに研ぎ澄まされた英語感覚と文藝理論の素養とを当然の前提とする氏の覚悟には、横文字を日本語にする受動的翻訳以上の野心をもとより放棄した日本人外国文学研究者には到底理解できない徹底性がある。

解毒剤が同時に毒でもあるという、ファルマコンじみたラシュデーイーの二面性を十分に意識しながらも、しかしアメリカ合衆国に在住のインド文化人として、翻訳が現実を変貌させ、人をすらすら殺めかねぬ業であることを十分に自覚し、それゆえ自分の翻訳活動に命を賭ける碩学から、もし生きていければ是非五十嵐という男に会ってみたかった、と言われれば、紹介者として冥利に尽きる。だが、その覚悟を託するため五十嵐がキーツから援用した「否定的能力」についても、当方の引用間違いを即座に指摘された。そして、よく覚え

く、寒流と暖流の不連続線上を漂う遊覧船のデッキの上で、急激な気温の変化に身を任せ、スピーカーから流れるシカゴ・シンフォニー演奏のマーラーの五番でも聞いていると、日常の現実はどこかへ消し飛び、アメリカを満喫している解放感、といった月並みな言葉でしか言えない、妙な非現実感に囚われた。船上の晚餐でようやく連日の夕食での「禁酒」を解かれたヨーロッパや中国からの参加者は、アル中の日本人と怪気炎をあげ、傍らでは果物に目のないラマヌジャン氏が皿からつぎつぎと獲物を漁っては抽象理論批判と翻訳論談ぎに情熱を傾ける。大役を果たされたフェルナンデス教授は安心もあつてか急に砕けた英語で話しかけてくるものだから、一週間で悪い癖のついた当方の話はいささか頓珍漢に

なったりもした。レナート夫人は飽きずに五十嵐問題で議論を吹っかけて来る。
次は日本で、とまた言われてしまった。毎度のように経済大国日本とその国立大学の貧困との格差に悩む。もとよりお招きできる設備もないし、まともな学会ひとつ企画する才覚もないのが情けない。
夜ごとに学生バーでバケツ・ビールまで付

き合ってくれた、疲労知らずの超人助っ人ロボの運転で、翌朝エクアドールの Xavier Lobo と空港に向かう。車内ではフランス語とイタリア語、スペイン語に英語が飛び交う多言語状況も愉快だった。週末の休暇につづいて新学期に沸くハーヴァード大学に参り燕京インスティテュートのフェローとして滞在中の福田真人一家のお世話となった。昨年からここで美術史の教鞭を取る旧友ノーマン・ブライソンに会う。その道すがら、ふと日本美術史の千野香織学習院大学助教から声をかけられたのには驚いた。学者の世の中はかくも狭い。今朝ブライソンの初講義に出たところ、とのこと。こんな環境で一年勉強ができれば本一冊書けないほうがおかしい、と言うと、ブライソンは、でも結構委員会に追われて、なぞと贅沢な悩みを漏らす。昨年国際比較文学会東京大会では芳賀徹氏から攻撃されてさんさんの目にあつた彼から、実は折り入って話がある、というので立ち寄つたのだが、内容はいまのところふたりの秘密。ひなびひの美術談義に昼食休みはあつと言ひ間に過ぎしきつ。

ついで、インディアナ大学のスミス・ジョーンズ先生からのお引きでブルーミントンへ

飛ぶ。最初は休暇のつもりだったが、せっかくならインフォーマルな話でも、と巧みに丸め込まれ(失礼)、シカゴと同じベイバーでごまかすつもりが、参上してみると美術教室の協賛も取り付けたとのことで、「フランス絵画のオリエンタリズム」を即興で一席やる羽目となった。なんと前日の夕べには英語の達人川本皓嗣先生が、俳諧とイマジスト・ポエトリーについて、用意周到かつ完璧な講演をされたばかり。質疑応答での口語への見事な砕けぶりとジョークの冴えも目にしたばかり。もとより比較にならうはずもないが、当方はといえば持参したスライドが唯一の頼り、構文はことごとく途中で破綻し、文法はめちゃくちゃ、単語はつぎつぎに忘却のまま二時間ちかくしゃべるといふ、思い返しても冷や汗のでる惨状。それでも日本の学生と違つて冗談には敏感に反応してくれし、美術史の学生も居たため、当方が題名など忘れるとすぐさまその場で助け舟を出してくれ、その積極的な雰囲気には感心した。はじめてのインディアナ大学での体験には、まだまだ書き連ねたいことも多いが、またの機会としよう。とりわけ助手のブッシュ・ヒロコ夫人にはスライド映写機やスクリーンの運搬した

いへんなご迷惑をおかけした。またお世話戴いたマックファイル夫妻、川本先生ご夫妻をはじめとする皆様にも、この場を借りて、最後に一言お礼を申し上げたい。

*

「一生雨晴今頭白、不識春江夜雨声」。ル・ピション氏が「光口夜雨」という南宋の詩の最後のこの二聯を引き、王賓が中国語で朗読したのを受けて、ラマヌジャンが彼の訳詩からどの「愛の唄」を引用したか。不幸にしてそのその記録はもはや残っていない(決して忘れないつもりだったのに)。註に示した訳書から、最適の句をみつめて、連句のひとつも想像して戴ければ、会議の雰囲気的一端もお解り戴けようか。若くは恋人との別離を愛い、老境にして尚知らぬ声に耳傾けるが人生か。

[注]

- (1) この学会の簡単な報告は『人文論叢』九、一九九二年、三重大学人文学部文化学科、65-96頁を、また(2)に至る道程は Alain le Picton, *Le Regard integral*, J.-C. Latès 1991 を参照されたい。なお、シカゴでの会議の英語名称は Cross-Cultural Communication and International Understanding P.48。
- (2) Ruth Behar, *Translated Woman*, Beacon Press, 1992.

- (3) Ganamath Obeyesekere, *The Apollonius of Captain Cook, European Mythmaking in the Pacific*, Princeton U.P., 1992. なお、ガナナ・オベセセキは『メトロポリスの幾』渋谷利雄訳、国書刊行会、一九八八年参照。
- (4) 柄谷行人「日本精神分析」、『批評空間』No. 5, pp. 341-45 の河合批判を参照。『東西の幾』の「魂」なり「自我」意識からなつて出でる心的機構を「魂」なり「自我」意識からなつて出でる心的機構と区別する認識論的枠組みが、相互に他許容する関係であり、それを温存したものの、西欧の近代社会をそれ以外の伝統的社会との区別をなす比較論が跋扈する。『自己』の「自己」は「外」からの抑圧を免れたリビドの「成」であるが、その不分明な心的機構とはかならぬ。
- (5) 鹿島武敏訳「Ashis Nandy "The Other Within: The Strange Case of Radhabhadra Patil's Judgment on Culpability"', *New Literary History*, 1992, 23, 45-67. 直訳は『鹿島武敏』。
- (6) Shigemitsu Inaga, "Le Shintoisme vu par les Européens", *Jinbun Ronbun*, The Faculty of Humanities and Social Sciences, Mie University, No. 9, 1992, pp. 53-64.
- (7) Milton Singer, *Cross Cultural Frontiers with Rood's Symbolical Algebra*, University of Chicago, 1992.
- (8) Cf. Ashis Nandy, *The Tao of Cricket: On Games of Destiny and the Destiny of Games*, New Delhi, 1988.
- (9) cf. John MacAloon, *This Great Symbol, Pierre de Coubertin & the Origins of the Modern Olympic Games*, University of

- Chicago Press, 1984. 『オリンピックの近代』柴田元幸・菅原克也訳、平凡社、一九八八年。また『世界を映す鏡』高山宏解説、光延明洋他訳、平凡社、一九八八年の最終章を参照。
- (5) Louis Kaufman, *Map Reformulation*, Princeton editions, London & Zürich, 1991.
- (1) Kyoko Inoue, *The Making of the Japanese Constitution*, University of California Press, 1991.
- (2) Shigemitsu Inaga, "Negative Capability of Tolerance: The Assassination of Hitoshi Igarashi" (to be published in the *Proceedings of the Conference*).
- (3) A. K. Ramanujan (translated by), *The Interior Landscape, Love Poems from a Classical Tamil Anthology*, Indiana U.P., 1967; *Speaking of Siva*, Penguin Books, 1973. 註を参照。